

同窓会設立の経過報告

西田吾郎さんを偲びつつ

準備会代表 井川 満
(昭和40年卒 名誉教授)

1. 「そうやなー、儂がやらんかったらいかんやろなー」と、いつもの穏やかな口調で発した西田吾郎さんのこの一言で、今回の同窓会設立活動は第一歩を踏み出し得たのであった。

設立活動のために多くの方が働いてくれた。準備会の方々のご労苦は勿論のこと、準備会で決まったことを重川教授を中心に、数学教室の教員・事務員の有志が順次的確にやり遂げてくれた。これら有志の方々は会議の準備をすると共に、会議が土曜日の開催にもかかわらず、出席してくれた。今に至るまでに、大きく大変なものから細々としたものまで仕事がたくさんあった。これらの仕事を教室勤務が終わった後、居残って担当の仕事を黙々とやってくれた。また、居残り仕事で片付かなければ、土曜日に教室に出てくるまでして役割を果たしてくれた。このような協力がなければ、同窓会設立の運動はここまでこれなかった。

しかし、西田さんが決断したことは、これらの協力とは質の異なる面があるように私には思われる。協力体制が良く出来上がっていても、中心となってやろうと決断する人が出ない限り、この種の事柄は第一歩を踏み出せないままで、いつしか消えてしまうのが常である。西田さんの決断によって、第一歩を実際に踏み出すことが出来たと私は思っている。

これは2014年4月20日を過ぎたころの出来事であった。事務室の篠崎由加里さんが、西田さんに数学同窓会設立の希望を伝えると共に、その活動の中心となることをお願いしたときの話である。じっと話を終わりまで聞いていた西田さんの返事が冒頭に記した言葉であった。

このとき、篠崎さんが西田さんに語った内容の要点は、

- 今が同窓会を作る最後のチャンスのように思える
- 同窓会設立の中心となりえるのは、西田さん以外にはいない

ということであった。この“最後のチャンス”というのは、次の2点にあったように思う：

- (a) 今は数学教室の事務員、特に主任は、2、3年毎に変わるようになっている。従って、事務室の中に教室の昔の学生、先生、出来事などをある程度でも知っている事務員は、もう少し年月を経ると全くいなくなるであろう。今なら昔を知っている人は何人かはいらる。その人なら同窓会設立の手助けができる。
- (b) 約20年前に始まった数学教室の卒業生名簿の整理は、2002年の名簿の発行で終わってしまった。最後に発行された名簿は古くなってしまっているが、まだある程度は使用できるだろう。今を外すと、卒業生への連絡は実質何もできなくなるだろう。

事前に篠崎さんから、同窓会設立を西田さんに頼む件について相談を受けた折、「心配なのは西田さんの健康である」と私は言った。当時の西田さんは週3回輸血を受けねばならない程に白血病が進んでいた健康であった。しかし、西田さんは自分の健康については一言も触れず、同窓会設立活動の中心となることを承諾したのであった。

2. 西田さんは、2007年に定年退職した。従って、上の会話は定年退職後7年経過した時のものであった。彼の現役最後の年度は、基礎共通教育担当の副学長を務めていた。昔の人

に分かり易く言えば、旧教養部長の役である。ただ、教養部が廃止されて以降、制度改変の問題がまだ続いており、担当副学長は、元の教養部長より大変であったと思う。

また、彼は長年に亘って入学者選抜方法検討委員会委員長をつとめ、同時に国立大学協会のこの問題の委員としても大切な役割を担ってきた。国立大学が入試を2度行うという全く馬鹿げた、かつ国民を愚弄するやり方を京都大学が実質やらなくなったのは、偏に西田氏の優れた見識と長年に亘る努力の賜物である。

このような長年の重責を負い続けた結果と私は思っているが、定年後間なしに、肺癌が見つかった。手術で取り除けばまず安心といえる段階は過ぎていたが、手術しても精々あと何ヶ月というところまで進んでいなかった。手術後に放射線治療を受けたが、(西田さんは自分では決して言わなかったが)これが白血病の原因と私は考えている。

「手術後2年間に転移が見つからなければ、癌は治癒していると考えてまず大丈夫なのだ」と彼はよく言っていた。しかし、この検査さえクリアできればというところまで来て、肝臓への転移が発見されたのであった。肝臓の3分の1強の切除手術を受けて、経過は良好でそれまでと変わらない生活に戻ったのであった。

これらの病気は、数学教室のプロジェクトとして始まっていた1300余ページのアメリカの教科書“Calculus”(著者 Anton 他)の翻訳・出版作業をやっていた期間に起きたことである。(元々は私たち二人はこのプロジェクトの応援団であったが、紆余曲折の末彼と私が中心となってしまった。)畑准教授に一部を手伝ってもらったが、7年間かかって“微積分学講義”なるタイトルで翻訳・出版を完成することができた。西田さんは、この仕事に加えて、“線形代数学”、“数、方程式とユークリッド幾何”、“数と図形と論理の話”の3冊を京大学術出版会から出版したのである。“線形代数学”は元々原稿は既に出来上がっていたが、現役時代は多用で本にする時間が無かったものと聞いている。他の二つは、構想はあったであろうが実際に原稿を書いたのは退職後である。“微積分学講義”は上・中・下巻の3分冊で出版したが、上巻と下巻は出来上がったときは彼は入院中で、出版会から届いたものを、私が病室にもっていったし、出版契約書への署名も病室でお願いした。“数、方程式とユークリッド幾何”の最終校は、病室でであった。

私は、こんな重病を患いながらよくも頭が動くものと驚いたものである。とはいえ彼の体のほうは少しずつ、少しずつ動きにくくなっていった。こんな庭仕事は出来なくなった、あんなことも出来なくなった、と折に触れて淡々と私に話した。私がそばで見えていても、歩幅が少しずつ縮まり、背中がだんだん丸くなってき、体力が落ちてきていることはハッキリと分かった。しかし、頭脳のほうは先に触れたとおり全く衰えを見せなかった。彼の鋭い頭脳は、翻訳の細かいところまで注意が行き届き、私の不十分な訳ではなかなか OK がおりず、私は頭を抱え込んだものである。校正も全ての部分に限らず目を通し、文章だけでなく組版のスペースのとり方まで、細かく指摘して、組版屋もさぞかし苦勞するであろうと思われるほどであった。

冒頭に記した西田さんの言葉は、“微積分学講義”の最後の部分の最終校を終えた日の約一週間後、彼が数学教室に来たときになされた会話である。そして、この日が西田さんが数学教室に来た最後の日となった。

3. 冒頭の会話のあと、教室内の教員・職員7名に「呼びかけ人」となってもらい、これに西田氏と私が加わった9名で一先ず最初の相談会をもつことが決まった。私の役割は、西田さんの助手であった。5月の連休が明けて、仕事に復帰したあたりの昼休みに弁当を食べながら話をすることに決まった。

それから約一週間後の4月28日の朝、西田さんと私が翻訳のために使わせてもらって

た部屋の電話が鳴った。西田さんからで、「今日輸血のための検査を受けると、血液の数値が大分悪いので、入院して直したほうが良いと医者がいう。その勧めに従って入院することに決めた。連休明けの予定していた呼びかけ人の会には多分出られないので、代わりにやっておいてくれないか」とのことである。彼のいつもと変らぬ調子もあって、入院と聞いてもさして気にも留めなかった。そして、代役は了承した。

入院はこれまで同様京大病院であったから、見舞いというより雑談をしに私は何度か病室を訪れた。「微積分学講義」の下巻が出来上がって届けたり、また出版契約書の署名をもらうために訪れたときも、退院が当初考えていたようよりも遅くなりそうだ、ということは聞かされたが、私は余り心配はしなかった。しかし、5月20日くらいだった様に記憶しているが、私が代理を務めた「同窓会呼びかけ人会」の報告と、準備委員への就任依頼文のたたき台を見てもらうために訪れたとき、様子はすっかり変っていた。奥様に来意を告げると、ややためらった様子で「今眠っているのだが」と言われたが、西田さんに声をかけて起こしてくれた。ベッドの見える場所へ私が入って彼の顔を見たとき、私は息を呑んだ。顔の2/3くらいが紫色になっており、顔全体が腫れてすっかり変っていた（この二日ほど前に、夜間に手洗いに行き転倒し、何かに顔をぶつけ、気を失って床に倒れているのを看護師が見つけたとのこと）。

私が知らずに、いつもの調子で気楽に病室を訪れたことを悔いたが、私を認めた西田さんは手を動かして、ベッド脇の椅子に座るよう指示した。止むなく私は椅子に座り、「呼びかけ人会」を開催し、準備会を作ることを決め、その依頼文のたたき台を見てもらうために来た旨を告げ、持ってきたたたき台を印刷した紙を渡した。

彼は紙をじっと眺めていた。病室に常ならぬ緊張が張り詰めたようであった。実際はさして長くはなかったのかも知れないが、私には耐えられないほどに緊張した時間であった。奥様が「お父さん、それは置いておいて、後で読んだらどうですか」と語り掛けをしたが、西田さんが奥様の語りかけに明らかな拒否を示した。それからまた、私には耐え難い時間が続いた。そして、彼は何かを語る様子なので、耳を近づけると「この文章では、学部と大学院の区別は分からないね」と言った。私が「そのことは、準備会で相談することになっています」と答えると、「それなら、その文案で良い」と言って、その瞬間に眠り落ちた。

後日にもう一度私は病室を訪れたが、その時は会話することが出来なかった。そして、数日を経た6月2日に西田さんは亡くなった。

西田さんとの最後の会話を思い起こすたびに、私は胸を締め付けられるような思いがする。目を開いているだけでも大変な時に、やや長い依頼文案を全力を傾けて読み取り、そこに「学部と大学院の区別」がなんら記されていないことを私に注意した集中力は驚く以外に無い。西田さんは最後まで彼らしく鋭い頭脳の切れを示した。そして最後の最後まで同窓会設立の代表者・責任者であった。

西田さんとの息詰まるような時間を持たなかったならば、「西田さんの代わりが務まるわけが無い」のは明らかで、準備会の代表などには決してならなかった。しかし、あの会話の後では、西田さんの代役から簡単には降りられなくなってしまった。彼は冷静に自分自身を見つめてきた人である。これほど速く終わりが来るとは思ってはなかったとしても、決して楽観を許さない身体状況であるのを自覚していたのは、検査の様々なデータを詳しく解説してくれたことから覗える。その彼が、同窓会立ち上げのために代表となることを決意した理由がどのあたりにあったのかは、私は聞いてはいない。しかし、彼がやろうとしていたことを、何もしないで投げ出すことは出来なくなってしまった。

4. 9名の呼びかけ人に加えて、さらに16名に準備会に加わってくれるよう依頼した。準

備会は4回開催された。概略は次のようである：

- 第1回準備会 発起人の条件としては、同窓会設立に賛成し、設立呼びかけの文書に名前を記すことに同意してくださることとした。
- 第2回準備会 同窓会名簿の作成手順、作成後の補充の仕方が話し合われた。現在でも確たる結論は得ていない。
会費徴収に関しても討議された。そして、京都大学同窓会との関係をどうするかを調べることになり、重川氏が調査した。
設立総会を平成27年6月6日、時計台の国際交流ホールで開催すること（ホールは予約済み）が報告された。
- 第3回準備会では、発起人を依頼する方々のリスト作成の手順、発起人依頼の文案などが検討された。また、規約案などのたたき台の作成を始めた。
- 第4回準備会では、規約案、細則案がさらに検討された。その議論の過程で、大学院教育における数理解析研究所と数学教室との関係の緊密さにより、研究所で大学院を修了した者の扱いについて、井川代表と向井数理解析研究所々長との話し合いが必要との結論になった。両者の話し合いと数理解析研究所内での論議を経て、数理解析専攻、数学・数理解析専攻数理解析系の修了生および研究所の教職員もわることとなった。

数学同窓会発起人会の準備は、準備会のメンバーとなっている職員たちが要領よく進めてくれた。

5. 発起人会は、2014年12月13日（土）14:00 から、理学研究科3号館110講演室（旧第3講義室）にて、53名の出席者をえて開催された。

同窓会を設立することは、異議無く了承されたが、会則（案）の会員資格については、様々の観点から多様な意見が出て、熱い議論となった。なかなか結論に至らず休憩を取る次第となった。長時間の討論の末、発起人会としての結論を出すことができた。

会則（案）や運営細則（案）の案は、若干の修正を施した上で総会に提出すること、および2015年6月6日の設立総会開催は了承され、当日の行事予定も承認された。

同窓会設立記念行事の準備は、これまでの準備委員会が若干名の更なる委員の参加を求めた上で、継続して行うこととなった。

6. 年が改まってから、設立記念行事に至る諸種の作業が始まった。思い出すままに作業の主なものを書き出してみよう。

- 卒業生を中心とした会員候補への案内の発送準備

準備会が使える卒業生の情報は、2002年発行の卒業生名簿である。ここに載っているデータがどのくらい有効であるか不明なので、発起人会で了承されたやり方に従い、学年幹事を立てて、これらの方に卒業年度を同じくする人を中心として、可能な範囲で連絡を取ってもらい、連絡のついた方には、準備室まで連絡先を知らせてもらう、という方法に依ることとし、学年幹事のお願いを発送した。

また、名簿管理のために京大アルムナイの担当者を訪ね、我々の目的に合うよう登録項目の変更をお願いしたこともある。これは、理学部全教室の了解が要ることであり、重川教授が中心となって運んでくれ、これらに必要な事務作業は図書室の田中さんと藤原さんが担当してくれた。

- 懇親会の準備

主なことは京大生協に依頼することとし、生協との打ち合わせを開始した。この作業は篠崎さんが中心となって進めてくれた。

- 旧教員、職員のリスト作りや旧職員との連絡などは、大槻さんと木下さんが担当してくれた。
- 会計は、篠崎さんと木下さんが担当してくれた。
- 数学教室に関わる思い出などを何人かの方々に執筆していただき、設立行事の参加者に読んでもらえる冊子の作成は井川が担当することになった。

作業の実際は相互に入り組んでおり、一応の主たる担当者が定まってはいるが、互いに協力しながらの作業であった。

7. 4月に入って、順序はややバラバラであったが、準備の整ったグループ単位で、設立行事への案内を発送した。思いの外、発送作業には時間が掛かった。また、案内を受け取った方々から新たな情報もいただき、送付先が分かった方にはその都度案内を送った。

基礎となる資料としては、先にも書いた通り2002年発行の卒業生名簿が頼りであるため、案内が届かない方が多数になるのは覚悟のうえとはいえ、絶えず気にかかることであった。致し方ないとは言え、案内の届かなかった方々にはお詫びを申し上げるほかはない。

案内の発送作業に入る直前の3月末で、図書室の田中紀子さんが定年退職となった。田中さんは図書の仕事から離れて自由となった時間の全てを同窓会準備のために使ってくれた。

案内発送の相当部分を終えた4月25日に準備会を開催し、経過報告とこれからの仕事のチェックを行った。この会議のなかで、「乾杯はビールではなく、白鷹のお酒でしたい」との声が上がった。(厚かましいことではあるが) 全員賛成であり、結果、同窓生、かつ元教員である白鷹酒造の辰馬伸彦さんをお願いすることとなった。辰馬さんは我々の願いをかなえてくださった。「白鷹」の薦被りの鏡割りの後に、この樽酒で乾杯ができることとなった。

8. 様々な準備作業に追われながら日々を過ごしているうちに、残った日数も3週間を切った。

私の思いを超えて、多くの方々がご参加くださることが分かってきて、感謝の思いを深くしている。「西田吾郎さんならこんなへまをしないなー」などと思いつつも、「儂がやろう」と言った彼の思いの最低線は何とか受け継ぐことが出来たかと思っている。

数学教室教授会合が同窓会設立を支援して下さり、さまざまと便宜を図ってくださった。まさに零から出発をしなければならなかった準備会にとって、この支援がなければ何もできなかったことと思う。また、一々名を上げることはしないが、1年余の準備期間中、作業を共にしてくれた方々、相談に乗ってくださった方々、我々の無理な頼みを聞き届けてくださった方々に心からのお礼を申し上げる。

京大数学同窓会設立に関心を寄せてくださった全ての方々に、わけてもご多用の中を遠近に関わらず設立行事に参加くださる方々に感謝の意を表したい。

(2015年5月18日)